

## バルセロナで開始した、 夢の研究留学生活

Institute of Research in Biomedicine Barcelona

齋藤 那由多

(東京慈恵会医科大学内科学講座呼吸器内科)

まず最初に、長年の夢であった留学を、上原記念生命科学財団のご支援により実現できたことに感謝の意を示したい。ややもすれば少しハードルが高い、コネ等がない未知の世界で研究を開始することができたのは、上原記念生命科学財団のご支援による所が大きい。

私は、現在、スペイン、バルセロナ大学 Institute for Research in Biomedicine (IRB) の Cellular Plasticity and Disease Lab に留学し、ポスドクとして研究を行っている。IRB Barcelona は、世界中からトップレベルの研究者が集まる研究所で、世界各地の研究機関や病院との共同研究等のネットワークも広い。

研究室の Principle Investigator (PI) である Dr. Manuel Serrano は国際細胞老化学会の会長であり、癌抑制遺伝子、細胞老化研究分野で Nature、Cell、Science などのトップジャーナルの業績を持つ、細胞老化研究の第一人者の一人である。

私は、呼吸器内科医として、臨床経験を積んだ後、母校、東京慈恵会医科大学大学院、呼吸器内科の研究室で基礎研究を開始した。難治性呼吸器疾患を細胞老化等との関連で研究している研究室である。入学当初、研究や実験手技について知識がなかったが、教授を始め指導医の先生方にご教授頂き、分子生物学や呼吸器病理の基礎を身に着けた。研究テーマは、慢性閉塞性肺疾患における細胞老化の役割についてであり、次第に細胞老化研究に興味を抱いた。国際細胞老化学会で現在の指導者である Dr. Serrano の講演を聞き、細胞老化のメカニズムだけでなく、疾患の診断、治療への応用を含めた研究の可能性に感銘を受けた。この PI のもと、難治性呼吸器疾患の新規診断、治療のアプローチを細胞老化の観点から研究したいと強く思った。

言葉の壁があるスペインへの留学、優秀な研究者が集まる研究室へ臨床を経てからの留学であること等から不安もあった。しかし、PI が優秀な科学者であるということはいうまでもなく、非常に人間味溢れる温かい心を持つ指導者でありすぐに不安は解けた。Dr. Serrano とのディスカッションでは、いつも探究心を刺激され、新しい発見に対する希望や道筋を示して下さり、興奮する。そんなお人柄もあってか、世界から集う 20 名のメンバーは、皆熱意溢れ、メンバー同士尊重し、助け合い、ラボ全体として Science を愛している雰囲気がある。この様な素晴らしい環境で研究生活を送ることができることに感謝し、患者さんのためになる研究へ繋げられるよう努力したい。今後は自身で研究を計画執行し、

後進を指導する立場になる私にとっても学ぶことが大きい。

このような貴重な機会を得ることができたのは、東京慈恵会医科大学内科学講座呼吸器内科の桑野和善教授、荒屋潤教授をはじめ医局の皆様のご指導があったことであり、心より感謝いたします。